

## 野外彫刻を題材とした鑑賞教材 ーパブリック・アートを題材とした鑑賞教育プログラムー

新井義史<sup>1</sup>・眞鍋幸恵<sup>2</sup>

<sup>1</sup>北海道教育大学釧路校美術科教育 <sup>2</sup>北海道教育大学釧路校大学院美術科教育

### The teaching material for art appreciation focused on the outdoor sculptures

Yoshifumi ARAI<sup>1</sup> and Sachie MANABE<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Fine Art Education, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

<sup>2</sup>Department of Fine Art Education, The Graduate Course, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

#### Summary

The contents of the art education include the appreciation of art works in imminent living environment. It has the aim the students think about their environment and community through appreciation of works. Generally, The outdoor sculptures installed in the community space are called "Public Art", are distinguished from works exhibited in museums.

In this report, we consider the program for art appreciation focused on Public Art.

I. A trend and problems of Public Art in Japan

II. Public Art as the teaching materials of environmental education and art education.

III. The viewpoints of appreciation lesson of Public Art

IV. The example of the teaching materials

The program for art appreciation "The outdoor sculptures in Kushiro"

#### はじめに

環境教育では、公害や自然環境だけでなく、身近な生活環境を含めた題材も含まれている。美術教育では、生活環境や都市環境における造形物を扱う題材があり、快適な生活環境や都市形成などを考える視点を養うことがねらいとされている。

公共空間に設置された野外彫刻などの芸術作品は、美術館に展示された作品と区別して「パブリック・アート」と総称することが一般化しつつある<sup>1)</sup>。パブリック・アートは児童・生徒にとっても日常的な生活環境にある作品であり、それらの作品は地域社会や環境形成とも密接に関わっている。本稿では、地域にあるパブリック・アートを題材とした鑑賞教育の方法について述べたい。

Iでは、日本のパブリック・アートの動向と問題点を述べ、IIでは、環境・美術教育における教材としてのパブリック・アートについて考察する。IIIにおいては、パブリック・アートの鑑賞指導の観点を述べ、IVでは、釧路市野外彫刻を題材とした鑑賞教材を例示した。

#### I. パブリック・アートの動向と問題点

公共空間に野外彫刻をはじめとする作品を設置する試みは、日本では明治以降に始まったとされる。明治期においては、記念碑や肖像彫刻などが、公園や人物にゆかりある土地などの特定の場所に設置された。これらの像は、偉業を成し遂げた人物や歴史的な事件等を後世に伝えるための記録的な役割があった。その後、第二次世界大戦後になると、平和や真実などの象徴を表す裸婦像や家族像が設置されるようになる。代表的なものとしては、広島平和記念公園の「原爆の子」や「嵐の中の母子像」などの具象的モニュメントが挙げられる。戦後になると記録的な彫刻だけでなく、作家による彫刻が設置され、アートとしての傾向がでてきた。

1960年代になると、神戸と宇部で公募による野外彫刻展が行われた。この二つの公募展は設置事業型の野外彫刻展であり、自治体に優秀な作品が買い上げられた。神戸と

宇部の野外彫刻展はビエンナーレ形式で継続的に行なわれ、日本の現代彫刻家にとって大きな活動の場となった<sup>2)</sup>。

70年代後半になると、「文化1%システム」や「パーセント・プログラム」と呼ばれる文化政策が行なわれ、野外彫刻の設置事業が全国的に普及し始めるきっかけとなった。これらの政策は新しい公共施設などの建築物を建設する場合、建設費のある一定の割合を芸術作品の設置などに当てる事業であり、元々は欧米の行政が行なう文化行政を元にしてきた。アメリカの行政による「パーセント・プログラム」は、ビルディングが乱立する無機質な都市環境にアートを導入し、うるおいのある環境を作ろうとするアーバンデザインの思想にもとづく<sup>3)</sup>。日本においても東京や兵庫などの都市が「パーセント・プログラム」を導入し、街の中に彫刻が設置されるようになってきた。

80年代では、文化行政の流れも受けて、神戸や宇部を手本にした野外彫刻の公募展が各地で開催され、全国的に普及し始めた。各地に広まった野外彫刻展の増加の背景には、都市の開発や建設事業や芸術文化振興事業と泡沫経済との関連が指摘されている。竹田直樹は80年代後半に普及した野外彫刻展の特性を、「展覧会重視型」、「設置事業重視型」、「素材指定型」の3種類に分類している。そして、野外彫刻展が文化行政と景観形成の二つの要素を持つものの、形だけ真似され形骸化し、まちづくりの環境形成のために設置される作品の質に違いが生じてきたことを指摘している<sup>4)</sup>。

90年代に入ると、自治体主催の野外彫刻展による設置事業よりも、アートディレクターによるランドスケープデザインも含めた大規模な都市の再開発が活発になった。1994年に完成した「ファーレ立川」がその発端とされている。東京都立川市駅前のアートを導入した再開発では、109点もの作品が設置されている。「ファーレ立川」のパブリック・アートは、都市空間のアクセントとして人の目を楽しませるためだけでなく、作品が車止めや街灯、ベンチなどのストリート・ファニチュアとしての機能としての役割を果たすという斬新なアイデアが注目された。その後、東京近辺には「新宿アイランド」や「臨海副都心彫刻群」などのように一区画に複数の作品を設置することで、まるで街が美術館化されたような地区が現われてきた。

大都市以外に地方都市でも、次々に大規模なパブリック・アートを導入する動きが生じてきた。釧路市では2000年に「シビック・コア事業」<sup>5)</sup>として、幸町地区の再開発に、ポルトガルの作家ジョセ・ドウ・ギマラインシュの彫刻作品を大小合わせて40個以上を設置した。また、新潟県南部の市町村で行なわれた「越後妻有アートトリエンナーレ」のような設置事業とイベントが一体化した事業も

行なわれた。都市におけるこのようなパブリック・アート導入の広がりについては、批判も含めた様々な議論がなされている。大規模なパブリック・アートが企画される際には、市民に対してワークショップやシンポジウムを行い、市民参加を図ることが多い。だが、これらの活動が体裁としての活動であり、恒久的な彫刻としての価値を生み出していくほどの意義があまりないことと、アートプロデューサーが注目されブランド化しているという批判がある<sup>6)</sup>。

野外彫刻設置事業が全国的に普及していくにつれ、作品と市民の間に生じる問題も噴出している。土地利用の調査を行わず設置し、街中のいたる所に彫刻があるため、市民生活や企業の店舗の土地利用ができなくなるなどの批判も起きている。一体につき1千万円から数千万円かかる設置費、設置後の維持管理費などの資金、作品の選定基準の不明確さなども批判の対象となっている。自治体に対しては、地域社会の歴史的状況や自然環境を踏まえ、社会的必要性を判断しながら、パブリック・アートを始めとする都市の環境形成を行なうことが求められている。

## II. 環境・美術教育の題材としてのパブリック・アート

### 1. 直接的な鑑賞題材としての役割

街中に設置されている野外彫刻は、実際に本物を見る鑑賞活動ができる身近な地域の題材である。芸術作品に直接触れる機会の少ない学校教育では、美術館や博物館の活用が求められている。しかし、授業の時間数や移動手段などの制限もあり、すべての学校が積極的に活用できるとは限らない。駅前や公園にある作品は、授業時間内でも実地による鑑賞活動は可能であり、時間数が少ない中学校2・3学年の鑑賞題材としては利用しやすい題材といえよう。児童・生徒の身近にある作品であれば、課外活動として、個人やグループで実際の作品や周囲の環境との調和などを、直接的に鑑賞する体験的な学習ができる。

彫刻などの立体作品は、実際の大きさや量感、空間性などの造形要素を、スライドや作品に関する文献解説だけでは実感できない面もある。彫刻を鑑賞する上で大切なことは、様々な角度から見たり、直接触って形を確かめることである。日常生活環境にある彫刻作品は、彫刻の見方や基礎的な知識を習得する上でも重要な題材として活用が期待される。

## 2. 美術教育における環境と造形の視点

学校教育の美術科では、「身近な環境のデザイン」や「デザインや工芸の鑑賞」の領域として、生活環境や自然環境にある幅広い造形物を対象にしている。児童・生徒が、都市環境の題材を通して、まちづくりには経済性や利便性だけでなく、アメニティや景観美が重要であることを理解し、美術が社会的に果たす役割について関心を持つことがねらいとされている。

### (1) 指導書における環境形成と造形

平成元年に告示された『中学校学習指導要領美術科』の、「デザインや工芸の鑑賞」の領域には、「ウ 自然と造形作品との調和に関心を深め、美術の諸活動が環境形成に果たす役割について理解すること。」がある<sup>7)</sup>。同年に文部省から出された『中学校指導書美術編』には、「美術の諸活動が環境形成に果たす役割」<sup>8)</sup>の具体例として、「街路に彫刻作品を置いたり、橋や建物などが周囲の環境と美しく調和」することについて触れ、まちづくりに生かされた環境の造形として取り上げられている<sup>9)</sup>。

### (2) 教科書に見られる野外彫刻と都市環境

1996年に出版された中学校美術科の2・3年下の教科書では、街や公園に設置された彫刻を紹介している。開隆堂、光村図書出版、日本文教出版から出された各教科書を分析すると以下の特徴が見られる。

①開隆堂「環境に造形する心—抽象彫刻を作る」(p28-29)

表現と鑑賞を組み合わせた題材であり、公共空間に設置された抽象彫刻などの立体作品がシンボルになっていることや、うるおいを与えることを解説している。また、環境や自然に配慮して設置することを示している。

②光村図書出版「現代の美術—生活の空間・環境をつくる」(p14-15)

公園や街の中にある作品が、環境づくりやシンボルとしての役割を果たすことを指摘し、美術館の作品との違いを挙げている。また、作品と環境の調和や維持管理について指摘している。

③日本文教出版 オリエンテーション「環境の中へ」(p1-2)

美術館以外にも、作品が設置されていることや、環境と造形のかかわりについて解説している。また、掲載した関根伸夫の作品と用賀プロムナードの特徴を挙げ、美術が果たす役割を見直すことを指摘している。

④教科書の掲載作品の特徴

掲載されている作品の特徴は具象彫刻よりも、抽象彫刻が多い(表1参照)。また、「スライド・イン・マントラ」のように子どもが遊具として利用している様子を掲載する例<sup>10)</sup>や、用賀プロムナードのような環境造形と合わせて示されている例<sup>11)</sup>もある。

#### 中学校美術2・3下(平成8年度出版)で

#### 記載されたパブリック・アートの例

○開隆堂 (p28-29)

「雲の牧場」新宮晋 札幌芸術の森野外美術館蔵 1990

「スライド・イン・マントラ」イサム・ノグチ ミラノ 1980

「会話」ニキド=サンファール 立川市 1991

○光村図書出版 (p14-15)

「赤い靴をはいた女の子」山本正導 横浜市 1971

「フログナー公園の彫刻」グスタフ・ヴィーゲラン オスロ

「トリディム」ヴィクトル・ヴァザルリ 1974

「広場の噴水」イサム・ノグチ アメリカ 1978

「風の櫛」エデュアルド・チリダ スペイン 1977

○日本文教出版 (p1-2)

「空相」(御影石・ステンレス) 関根伸夫 1980

用賀プロムナード [東京都世田谷区]

表1

パブリック・アートは芸術作品として社会的に認知されつつあるが、美術館の作品とは異なる質を持っている。美術館に展示・保管されている作品が、鑑賞や研究目的で収集されているのに対し、パブリック・アートの設置目的はむしろ、都市の再開発や景観美など「まちづくり」に大きく関わっている。パブリック・アートは環境や社会と密接なつながりがある作品であり、公共性や倫理が必要とされ、快適で文化的な環境形成を果たす役割がある。したがって美術教育では、パブリック・アートを審美性や芸術として、狭義の美術の枠組みだけで捉えるのではなく、環境形成のための造形としての視点も持つべきである。

## 3. 地域文化としての視点

町のシンボルやモニュメントとなっている彫刻作品には、その地域の歴史や風土といった象徴的意味が込められていることが多い。題名やモチーフがその地域の自然や動物に由来する作品や、素材が地場産業で使われる石材などを使用している作品もある。

これらの彫刻作品は、その地域の顔となり精神的な連帯感を支える役割も担っている。観光名所として地域の経済活動を支えるだけでなく、地域社会のアイデンティティや誇りとしての価値を持っている作品もある。釧路市民から親しまれ、釧路のシンボルとなっている幣舞橋はその例で

あろう。幣舞橋の「四季の像」は昭和52年に市民運動により設置された彫刻作品である。しかし、設置に至るまでの経緯、その当時の市民の活動や反応などは、時代とともに忘れ去られつつある。児童・生徒が、作品の歴史的背景などに触れ、作品の意味を理解することは、モニュメントのシンボル性を継承する上でも重要である。

### Ⅲ. パブリック・アートの鑑賞指導の観点

#### 1. 作品の多様性と鑑賞視点の違い

彫刻作品を鑑賞題材とする場合、具象彫刻、抽象彫刻、半具象彫刻によって作品の見方やねらいが異なる。また、シンボルのような作品と機能性のある作品でも扱い方が異なる。

##### (1) 具象彫刻

具象彫刻は児童・生徒にとっては、具体的に何が表わされているのか認識しやすい題材である。その反面、量・空間・動勢などの造形要素を把握させるのには不向きであろう。だが題名や設置場所などを通して、作者が作品に込めた意味を解釈することができる。

##### (2) 抽象彫刻

抽象彫刻は、普段見ている現実世界にある事物を表現した作品ではないことから、児童・生徒にとっては作品が何を表しているのかを把握しにくい。抽象彫刻は、具象彫刻とは逆に造形要素について観察し、量・空間・動勢について理解したり、素材の違いを比較することに向いている。また、幾何学的な抽象彫刻は、建築物や電柱、信号機などと素材や形態が類似し、風景の中に埋没している場合もある。都市の造形物と幾何学的な抽象形態の関係性について話し合う素材ともなりうる。

##### (3) 半具象彫刻

半具象彫刻は具体的な形体が作者の感性により強調された彫刻であり、子どもたちにとっては、様々にイメージを膨らませることができよう。題名や設置場所などを手がかりに元となる事物が何を表しているのかを連想し、話し合う活発な活動が期待できる。

##### (4) 機能性のある作品

パブリック・アートには、シンボルやモニュメントの他にも、ストリート・ファニチュアとしての機能を持った彫刻作品がある。ストリート・ファニチュアは、遊具として子どもの遊び場や憩いの空間を形成し、あるいはサインのような情報的な機能もある。機能性のある作品は、実際に

使いどのような機能があるのかを調べることや、利用している市民の様子などを記録する活動もあるだろう。また、作品の大きさや設置された周囲の空間の違いを比較することにより、その役割の違いについて理解させる方法も挙げられる。

#### 2. 発達段階に適した題材の扱い

パブリック・アートは都市の環境形成との関係もあり、作品を主観的に鑑賞するだけでなく、社会的な側面から分析することも可能である。しかしながら、パブリック・アートの社会的要素などは低学年にとっては、内容が高度になりやすい。発達段階にあわせた活動や学習内容、題材の選定を行なう必要がある。学年による題材の扱いについての観点を以下に挙げる。

##### (1) 小学校 (1 学年～4 学年)

小学校低学年や中学年は、発達段階的には体験的で感覚的な鑑賞活動を主体にし、記述よりも対話を中心とした観察を行なう。作品に直接触れる「ハンズオン」を取り入れたり、すべり台などの遊具が設置されている場合は遊びを通して、作品の形の面白さを通して感じることを授業のねらいとする。その遊びの中では、作品の形の面白さを生かして新しい遊びを創造したり、個人だけでなく集団遊びなどに発展させるような経験をさせることが望ましい。また、近くの公園に「こんな形のすべり台があったらいいな」というテーマで、理想の遊具を描く表現活動と組み合わせることも、パブリック・アートや環境の造形に対する関心を深める学習につながるであろう。

##### (2) 小学高学年 (5・6 学年) から中学校

身近な題材を通して作品の意味を再発見したり、地域社会や環境に関心を持たせる学習を行なう。実地による鑑賞を通して、作品の造形要素を観察して記述する活動や、スライドなどの資料を使い、作品の意味を解釈する批評的な鑑賞活動を行なう。その批評的な活動で、社会的側面を扱う上では、実際の作品と地域の関係性を示した具体的な事例を扱い、要素が複雑になりすぎない配慮をする。

### Ⅳ. 教材例

パブリック・アートを鑑賞題材とした教材例として、釧路市のシンボルともみなされている「四季の像」の彫刻作品を題材とした授業プログラムを以下に示した。この教材のねらいは、普段見慣れた彫刻作品の価値を再発見し、パ

ブリック・アートの経済的側面や市民の反応など社会的な背景などを扱うことによって、客観的に鑑賞する姿勢を身につけさせることにある。したがって、実地による鑑賞活動と資料を使った批評的な鑑賞活動を中心に行なうこととし、鑑賞活動の段階を①事前指導、②実地鑑賞（観察・記述）、③形態の分析、④意味の解釈、⑤まとめの5つに分けて構成した。解釈では、題名の意味や設置の目的、な

らびに資金の調達方法について考え、「四季の像」が市民運動によって建てられた重要な意味を理解させたい。

教材化にあたっては、1978年に釧路幣舞橋彫像設置市民の会から刊行された『市民運動の記録 幣舞橋と「道東の四季」像—ある「橋と市民と彫刻」の物語』<sup>12)</sup>を参照した。

1. 題材名 鑑賞 「幣舞橋には、なぜ彫刻があるの？」

2. 対象 小学5・6年

3. 題材設定の理由

小学校高学年になると、作品を観察して、その造形要素や自分の感想を記述することができるようになる。また作品を鑑賞する際には、好き・嫌いなどの主観的な観点だけでなく、作品の成り立ちなどの社会的背景の観点で理解することができる。

釧路市内には、多くの彫刻作品が街の中に設置され、児童も直接触れる機会がある。幣舞橋の「四季の像」は、テレビで中継されたり、観光名所ともなっているの、釧路の顔となる作品であることは認識しているだろう。しかし「四季の像」がどのような目的や経過で設置されたのかという歴史を理解しているとはいえない。市民運動によって像が建てられたことや、題名に込められた意味などを理解することは、児童が地域社会に関心を持つ上でも重要である。

児童が「四季の像」を課外活動で観察し、スケッチや記述による鑑賞活動を行なう。その活動を踏まえて、授業では設置の状況を分析する活動や、作品の題名や設置の由来などの意味を解釈する客観的な鑑賞活動を行なう。この鑑賞活動を通して、釧路の街に彫刻が設置されていることに関心を持ち、釧路の地域社会と美術のつながりについて理解させたい。

4. 学習のねらい

- ①実際に彫刻を鑑賞する活動を通して、街に彫刻が設置されていることに関心を持つことができる。
- ②四季の像の意味（作品の意味、歴史的背景、市民運動）を理解することができる。
- ③作品に対する意見や感想を自分の言葉で発表し、友達と話し合いをすることができる。

5. 授業の計画（45分）

導入・・・①事前学習

（釧路の彫刻について）／15分（前授業の終わり）

展開・・・②作品の観察・記述（各自実地鑑賞・課外活動）

③発表と話し合い

- 1) 作品の特色／10分
- 2) 裸婦像が設置された理由／10分

④解釈

- 1) 題名の解釈（道東の四季）／5分
- 2) 環境について考える／5分
- 3) 設置までの経緯／10分

まとめ・・・⑤感想レポート／5分

6. 本時の展開			
	児童の学習活動	教師の主な発問と指示	留意点
導入 ■前時の終わりを使って 15分	<p>①事前学習</p> <p>釧路市に設置されている彫刻作品の既得知識の確認。</p> <p>【児童の反応】 見かけたことある。あまりない。</p> <p>【児童の反応】 幣舞橋・丸井今井周辺・運動公園 ○普段利用するお店や公共施設などを想像する。</p> <p>【児童の反応】 女の像だったような気がする。 テレビの天気予報にも出てたような。</p> <p>【児童の反応】 本時の内容と課題活動を理解する。</p> <p>【鑑賞カード】 ①どんなポーズをしていたのかスケッチする。 ②作品に関する情報（タイトルや作者など）</p>	<p>みなさんは、釧路の街の中で彫刻を見たことがありますか？</p> <p>見たことがあった人は、どこで見かけましたか？</p> <p>【解説】 釧路にはたくさんの彫刻が設置されています。</p> <p>幣舞橋にある彫刻について何か知っていることがあったら教えてください。</p> <p>幣舞橋の彫刻は釧路だけでなく、全国でも知られている作品です。次回の授業では、&lt;幣舞橋になぜ彫刻があるの？&gt;をみんなで考えていきましょう。</p> <p>幣舞橋の彫刻はどんな彫刻なのでしょう？ 次回の授業前に、実際にみなさんに見てきてもらいたいと思います。</p> <p>【解説】 鑑賞カードと活動内容の説明</p>	鑑賞カードの配布
課外活動	<p>②作品の観察・記述（各自実地鑑賞） 実地による鑑賞活動は、各自が課外活動として、土日・祝日などを利用し、実際に幣舞橋に行く。</p> <p>【活動内容の視点】 ①観察したことを鑑賞カードに書く。 ②色々な場所から見てみる。 ③作品のポーズの特徴をスケッチで表わす。</p>	教師は、学級の状況に合わせて課外活動について考慮する。	
展開 40分	準備：鑑賞カード	準備：スライド「四季の像、作品のエスキース、4人の作家、設置当時の写真、ヨーロッパの橋、洞爺湖彫刻公園、釧路市内の作品数点、設置の経緯の流れ」名札、感想レポート用のプリント	

<p>展 開</p>	<p>③発表と話し合い 1) 作品の特色 (10分)</p> <p>【児童の活動】 4人の児童を選び、話し合いながら四季の像のポーズを取らせる。</p> <p>【児童の反応】 ①素材 鉄かな金属? ②2メートルくらいかな? ○素材が銅で作られていることや、実際の大きさについて知る。</p> <p>2) 裸婦像が設置された理由 (10分)</p> <p>【児童の反応】 女の裸を置くのはヤラシイから。女の人たちに失礼だと思う人もいたんじゃないの?</p> <p>【児童の反応】 見慣れたから、別にいいと思う。なじんでいると思うよ。嫌だと思ってる人もいるのかな?</p> <p>【児童の反応】 彫刻みたいのが乗っているよ。</p>	<p>幣舞橋の彫刻について、皆さんの鑑賞をもとに話し合ってみましょう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>4体の彫刻はどんなポーズをしていましたか?どんな像だったのかポーズしてみてください。</p> </div> <p>【教師の働きかけ】 4体の像のポーズを身体で表わして、確認させる。(A B C Dの名札をつける。)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>写真図版でポーズを確かめてみましょう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>彫刻の材料は何で作られていましたか?大きさはどのくらい?</p> </div> <p>【解説】 銅で作られています。奈良の大仏さんと同じ金属です。大きさは、2.3mくらいです。実際の女性の背の高さより大きいですね。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>4つとも女性の裸の像ですね。皆さんはそのことをどう思いますか?</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>この新聞記事を見てください。実は裸婦像を置くことに反対する声もありました。</p> </div> <p>【解説】 美術館にある裸婦像と違って、橋の上だと、皆が見る場所で公共の場だから、反対意見も多かったのですね。この裸婦像は当時、日本を代表する彫刻家の4人に注文して作られました。この4人は元々裸婦像を制作していました。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>設置されてから20年も経っていますが、裸婦像が設置されていることを、皆さんはどう思いますか?</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>このスライドを見てください。ヨーロッパの橋です。橋の上には何が乗ってますか?</p> </div> <p>【解説】 ヨーロッパでは、橋に彫刻を乗せることは昔から行なわれてきました。でも、日本では橋に彫刻を乗せる伝統はなかったんです。幣舞橋は日本ではじめて彫刻を乗せた橋なのですね。</p>	<p>【写真図版】 4体の四季の像</p> <p>【スライド】 当時の新聞記事</p> <p>【スライド】 ヨーロッパの橋</p>
----------------	--	---	---

<p>展 開</p>	<p><b>④解釈</b>  <b>1) 題名の解釈 (5分)</b>          「四季の像」に込められた意味を考          える。</p> <p>【児童の活動】          図版の A~D を「春」「夏」「秋」「冬」          に置き換える。</p> <p>○四季の像が季節をイメージして作ら          れたことを理解する。</p> <p><b>2) 環境について考える (5分)</b>          当時の状況や街の様子について話し合          う。</p> <p>【児童の反応】          ①昭和30年代の状況～花時計のあた          りは看板でごちゃごちゃしている。          MOO やキャッスルがない。          ②現在の状況～MOO やキャッスルホテ          ルといった建物や、花時計、富士見坂な          どができてキレイになっている。</p> <p><b>3) 設置までの経緯を把握する(10分)</b></p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>作品の意味を考えてみましょう。A~D の彫刻              のタイトルはどうなっていたかな？</p> </div> <p>通称「四季の像」と呼ばれていますが、本来は          「道東の四季」というタイトルがつけられてい          ます。</p> <p>【解説】          4 人の彫刻家が異なる季節を受け持って、季節          のイメージを関連させ作ったとされています。          それぞれの作者はこんなふうに説明しています。</p> <div style="border: 1px dotted black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>■ 4 体の作品の解説              「春」～この作品は身にまとっている薄い布の              流れや、穏やかな表情が春の柔らかさや暖かさ              を表わしている。              「夏」～両腕を上げて、まぶしい夏の日差しを              感じさせます。              「秋」～豊かな体つきは、秋の実りを表わして              いるようです。              「冬」～寒さに耐える姿と、春への希望をこめ              ています。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>現在の幣舞橋の状況と彫刻が設置される前の              昭和30年代の状況と比べてみましょう。              何が違いますか？</p> </div> <p>【解説】          釧路の街のシンボルとなる幣舞橋周辺の景観          を良くしようとする動きがこれを機会に起き          るようになった。彫刻がまちを美しくしようと          する意識を釧路に広めたきっかけとなっている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>幣舞橋に彫刻が置かれるまでの流れについて              まとめてみましょう。</p> </div> <p>スライドを通して、設置の経緯を説明する。          【設置までの経緯】          ①市民討論会          幣舞橋は今から20年前に、橋の架け替えが計          画された。その際に、市民の意見を聞くために          市民討論会が開かれた。市民討論会では、主婦          や高齢者、子どもが参加した。その結果、「橋          に彫刻を設置する」、「元々ある親柱を残す」こ          とが市民案として決定され、取り入れられた。          ②彫刻の選定          彫刻の選定経過では、プールデルなどの既存作          品を購入する案も出された。しかし、新制作展          に所属していた4人の作家(本郷新、船越保武、          佐藤忠良、柳原義達)に作品を注文して、釧路          をイメージした「道東の四季」を制作すること          が決定された。</p>	<p>【スライド】          ①昭和30          年代の状況、          ②現在の状          況</p> <p>【スライド】          ①市民討論          会の様子          ②親柱          ③プールデ          ルの作品          ④4人の作          家</p>
----------------	--	--	---



	<p><b>【児童の反応】</b>                  スライドと教師の解説を聞き、以下のような作品の設置までの経緯を把握する。                  ①市民討論会があり、市民の意見が取り入れられたこと。                  ②4人の作家について                  ③募金活動などの市民運動があったこと。</p>	<p>③市民活動                  彫刻の設置には、当時の金額で4千万円以上の資金が必要だった。当初予定していた企業からの寄付で資金をまかなうことが困難になった。そこで、市民の募金活動によって資金を集める運動がおき、彫刻の設置が実現した。「四季の像」は「彫刻作品を橋に設置する」という当時の日本では例のない事業であると共に、市民のカンパなどの資金集めにより実現したものである。だから、皆で作りにあげた橋と彫刻なんです。</p>	<p>⑤募金活動の様子                  ⑥除幕式の様子</p>
<p>ま と め  5 分</p>	<p>⑤感想レポート                  プリントに気がついたことや授業の感想を書く。</p>	<p>今回の授業を通して、気がついたことや感想など自由に書いて下さい。                  プリントを回収する。</p>	<p>プリントの配布</p>

註

- パブリック・アートは社会的な問題をテーマとしたパフォーマンスやインスタレーションを含むこともありその定義が定まっていない。今回は、公共空間に設置されている野外彫刻を中心としたパブリック・アートを扱う。
- 宇部の「現代日本彫刻展」は1965年から、神戸の「現代彫刻展」は1968年から行なわれている。
- 川田都樹子、「11 パブリック・アート」『現代美術館学』、並木誠士、吉中充代、米屋優編、昭和堂、1998年、p 330-343
- 竹田直樹、「パブリック・アート設置事業の本質 ーいま、岐路にたつ彫刻のまちづくり」、『地方自治JOURNAL 公共政策としての<アート>』、通巻208号、公人の友社、1995年、p 78-92
- 「シビックコア事業」は全国の都市で行われ、都市の再開発を行う。官庁施設、自治体の施設、民間の施設、その周辺のみちや広場など、それぞれが相互に連携しあうように計画・整備していくことで、市民の憩いの場となるような都市の拠点となるような地区を整備・建設することをねらいとしている。釧路市の都市再開発の一貫で行われているシビックコア地区の整備の最も大きな特性として、パブリック・アートの導入が挙げられる。大小さまざまな数の作品を、敷地内に設置し、一体感を図ろうとしたものである。その際に、現代アートを取り入れるという方向性になったのは、この景観形成を計画した、東京の企業アートフロントギャラリーのコンセプトに拠るところが多い。釧路市の都市開発課の話によると、「計画当初から現代アートを取り入れて、情報発信となるような地区にする目的があり、コンベンションの際に、アートフロントギャラリーの案を取り入れた。」とある
- 前掲書、3)、p 330-343
- 『中学校学習指導要領』、文部省、1989年

- 「デザインや工芸の鑑賞 2・3 学年」、「ウ 自然と造形 作品との調和に関心を深め、美術の諸活動が環境形成に果たす役割について理解すること。」における『美術の諸活動が環境形成に果たす役割』を示す。  
『中学校指導書美術編』、文部省、1989年、p 80
- 「最近では、環境を美しく豊かにするために、街路に彫刻作品を置いたり、橋や建物などが周囲の環境と美しく調和するように工夫されたりしている光景が多くみられるようになるなど、美術が環境化している。」  
前掲書、8)、p 80
- 「環境に造形する心」、『中学校美術科 2・3 下』、開隆堂、1996年、p 28-29
- 「オリエンテーションー環境の中へー」、『中学校美術科 2・3 下』、日本文教出版、1996年、p 1-2
- 『市民運動の記録 幣舞橋と「道東の四季」像ーある「橋と市民と彫刻」の物語』、釧路幣舞橋彫像設置市民の会、1978年

参考文献

- 『地方自治ジャーナル<特集>公共政策としての<アート>』、通巻208号、公人の友社、1995年
- 並木誠士・吉中充代・米屋優編、『現代美術館学』、昭和堂、1998年
- 田村明、『まちづくりの実践』、岩波新書、1999年
- 国松直行編著、『シリーズ自治を創る 6 都市デザインと空間演出』、学陽書房、1989
- 木原啓吉著、『歴史的環境』、岩波書店、1982年
- 千田満、『子どもと遊び』、岩波書店、1992年
- 『地方自治ジャーナル<特集>公立文化施設のアートマネージメント』、通巻 214 号、公人の友社、1996年